

令和 3 年 8 月 25 日現在

機関番号：37123

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K12517

研究課題名(和文) 認知症の介護者男性のためのアンガーマネージメントによる虐待防止プログラム開発

研究課題名(英文) Anger management abuse prevention program development for male caregivers with dementia

研究代表者

西尾 美登里 (MIDORI, NISHIO)

日本赤十字九州国際看護大学・看護学部・講師

研究者番号：20761472

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：認知症者のBPSDへの対応の中で、妻や母親から強要や攻撃、拒否をされると、夫や息子は身体的・精神的虐待をとる傾向があることが明らかになった。呼吸を整えタッチングする効果は脳波のパターンが有意に安定化し、不安定となったニューロン活動を安定化させる効果がある。皮膚からの感覚刺激は、記憶や人間特有の高次機能を活性化する効果により神経活動が安定する。認知症者を介護する男性の家族は、特に夫において、介護生活の中で妻へ暴言を吐いたり、暴力を振るいそうになった際、呼吸を整え妻へタッチングをすることは、ストレスを軽減し介護生活を継続するうえで有効である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

1) 認知症の人を在宅で介護する男性の、虐待の実態とその関連要因を調べストレスを軽減するためのアンガーマネージメントに着眼した介入効果を明らかにした。呼吸を整え、要介護者に触れると、介護ストレスの軽減が明らかになった。
2) 介入の心身両面の効果を実証的に明らかにした研究も見当たらないため、極めて独創的である。3) 他の疾患を有する家族介護者への効果を比較検討できる可能性をもち、最終的なプログラムは広く社会に普及できるようになると考える。4) プログラムの効果が本研究によって実証され、更に他の疾患でも研究が進めば、様々な疾患をもつ療養者の家族を対象に心身への健康に寄与できる可能性をもち。

研究成果の概要(英文)：For BPSD in people with dementia, it has become clear that husbands and sons are prone to physical and psychological abuse when forced, attacked or rejected by wives and mothers. It was the effect of adjusting and touching breathing has the effect of significantly stabilizing the pattern of brain waves and stabilizing unstable nerve activity. Sensory stimulation from the skin stabilizes nerve activity due to its memory-activating effect and human-specific high-performance. People with dementia, especially the family of men who care for her husband, adjust their breathing and touch her wife when she wants to rant or violence her wife during care. You can reduce stress by doing so. It is effective for continuing the long-term care life.

研究分野：高齢看護学

キーワード：認知症 男性介護者 妻 母 虐待 自宅介護

科学研究費 終了報告書

認知症の介護男性のアンガーマネージメントによる虐待防止プログラムの開発

研究責任者: 西尾美登里

福岡大学医学部倫理審査委員会 (承認番号 2017M40)

当研究の概要

認知症者の **BPSD** への対応の中で、妻や母親から強要や攻撃、拒否をされると、夫や息子は身体的・精神的虐待をとる傾向があることが明らかになった。呼吸を整えタッチングする効果は脳波のパターンが有意に安定化し、不安定となったニューロン活動を安定化させる効果がある。皮膚からの感覚刺激は、記憶や人間特有の高次機能を活性化する効果により神経活動が安定する。認知症者を介護する男性の家族は、特に夫において、介護生活の中で妻へ暴言を吐いたり、暴力を振るいそうになったりする際、呼吸を整え妻へタッチングをすることは、ストレスを軽減し介護生活を継続するうえで有効であった。

当研究の意義

1. 日本の認知症の人を在宅で介護する男性の、虐待の実態とその関連要因を調べストレスを軽減するためのアンガーマネージメントに着眼した介入効果を明らかにした。呼吸を整え、要介護者に触れると、介護ストレスの軽減が明らかになった。
2. 介入の心身両面の効果を実証的に明らかにした研究も見当たらないため、極めて独創的である。3)他の疾患を有する家族介護者への効果を比較検討できる可能性をもち、最終的なプログラムは広く社会に普及できるようになると考える。プログラムの効果が本研究によって実証され、更に他の疾患でも研究が進めば、様々な疾患をもつ療養者の家族を対象に心身への健康に寄与できる可能性をもつ。

研究の学術的背景

我が国の高齢化率は世界最高レベルで、今後もこの傾向は進展することが予測されている。超高齢化にともない認知症患者の増加が顕著である。認知症を介護する男性が、主たる介護者の割合は、**1981年 8.2%**、**1999年 18.6%**、**2010年 32.2%**と急増し、認知症者の増加と同様に男性介護者の増加も顕著である。男性介護者の心身の健康については、**QOL**が低く精神的な問題を有している者が多い、睡眠障害の割合が高い、相談を求める割合が女性よりも有意に少ない等とされる。**2006年～2008年**の間に起こった新聞報道による介護殺人事件では**71.8%**が男性であり、続柄は息子が**36.9%**、夫が**30.1%**であった。認知症は虐待の要因になりやすいと示唆されており、厚生労働省の高齢者虐待の調査では、**2011年度**の虐待加害者の**40%**は息子であった。認知症の療養者は介護事件の被害者の半数以上を占め、虐待の行動は絶望とうつによって生じるとされ、介護事件の加害者の半数は、発見や治療のされていない、うつやその他の精神的な問題を抱え、周囲からの孤立とストレスによる無力感から事件へ至ったとされる。

厚労省は**2011年**にがんや心臓病に加え精神疾患を**5大疾病**の一つとして加えた。わが国の調査で自殺者の**3分の1**は**60歳以上**の高齢者であり、**2～3割**はうつ病と考えら

れるケースであったとことが指摘されている。高齢期には基礎疾患の有病者が増加し、がん、心疾患、脳血管疾患などの生活習慣病の発症率が急増することに加え、特に男性は社会的な地位や役割を喪失するとされ、加えて友人の死や家族の健康までも喪失する体験を味わうとされる。慣れない家庭の雑事に加え、介護問題に遭遇し対処せざるを得ないストレスフルな出来事の中で、男性介護者は在宅介護を継続において、うつ状態やうつ病を発症させる要因であることが報告されている。

要介護者への虐待者の半数以上が男性であることや、特に認知症高齢者を介護する男性は、ストレスを抱えたままケアされず、周囲から孤立しやすいと想像される。終わりの見えない介護で疲労が蓄積し将来に悲観し、生活に疲弊し、介護継続困難な状況への対処として虐待に発展しやすいことが考えられる。

海外・国内の男性介護者を対象とした先行研究では、社会資源に着目し QOL を高めるための支援の検討が複数ある。Nishio は男性介護者の介護問題への対処について尺度を開発し、介護負担感や抑うつ症状との関係を示し（2011～2015）男性介護者の社会資源につながる仕組みづくりについて、取り組みを実施している。しかし、日本の男性介護者は、ジェンダー的価値観から、社会資源を頼る自分を許容できない傾向があることが明らかになった。

日本では、男性介護者が自己で実践できる介護負担感や怒りを軽減し、虐待を制御できるトレーニングに関する研究はみあたらない。そこで、認知症の人を在宅で介護する男性介護者の介護継続と虐待防止を目指し、アンガーマネジメントによる虐待防止プログラムを作成し、プログラムの実用性を検証することを目的として本研究を実施した。

言語の定義 虐待：暴力などで身体的に害を与える、言葉などで心理的に攻撃する、無視、経済的権利を剥奪する、性的に辱めを与えること。

研究のプロセス

研究 1. 認知症の人を在宅で介護する男性の、虐待の実態と関連要因を明らかにする。

研究 2. 認知症の人を在宅で介護する男性に対しアンガーマネジメントを行い、介護問題対処への効果を調査する。

研究 3. 虐待防止のプログラムを作成し、実用性について検討する。

当研究のまとめ

研究 1. 認知症の人を在宅で介護する男性の、虐待の実態と関連要因

BPSD への対応の中で、妻や母親から強要や攻撃、拒否をされると身体的・精神的虐待をとる傾向がある。長期的な介護を担う中で人間関係や社会参加状況での困難感を抱えている。高齢の男性介護者は、家庭内での介護を担いながら社会的困難感を抱いている。医療者や介護サービス提供者は、男性介護者と信頼関係を構築し、男性介護者の言動や表情、妻や母親の身体と表情などを観察し、男性介護者へ具体的な認知症への対応方法を教示し、不安を傾聴し、疲弊している際にはレスパイトの支援を提供する必要がある。昔の男性に求められていた社会的役割からの脱却と、現代の男性には求められている家庭内役割の変化を促す支援と啓発が必要である。認知症者を自宅で介護している高齢男性が、介護を放棄せず、疲弊し不安を抱えながらも根気強く介護していることを理解し称賛する必

要がある。

研究 . アンガーマネジメントによる介護問題対処への効果。

自分を叱咤し介護に取り組んでいる男性は、介護に長く時間を費やし、介護負担感とストレスが最も高い。介護において苦しい過去を回想することにおいて、介護中の男性は、介護を終えた男性よりもストレスが高い。よって、アンガーマネジメントプログラムの対象は、介護中の男性を対象とすることが望ましい。男性の家族介護の継続において、介護を受容できず自責していないか、困難な状況を抱えていないか関心を寄せる必要がある。要介護者の続柄や役割意識に配慮し、介入方法を検討し、家庭内で治療やケアを実施する、男性介護者の対処を見極め他職種と共に支援する必要がある。マインドフルネスと顔のタッチングの効果 = アンガーマネジメントは、脳波のパターンが有意に安定化し、不安定となったニューロン活動を安定化させる効果がある。しかし、実施する家族男性の効果についての報告はみられてないことから、当研究の意義は大きいと考えられる。アンガーマネジメントを実施した息子は精神的ストレスが軽減し、夫は自律神経と身体・精神ストレスが軽減された。特に夫の介護によるストレスの軽減に有効であると考えられる。実施する男性の家族介護者にも、自立神経に良い影響をもたらす可能性が示唆された。夫は、ストレスの効果を感じている可能性がある。

研究 . 虐待防止のプログラムを作成し、実用性

BPSD への対応の中で妻や母親から強要や攻撃や拒否をされ、身体的・精神的虐待を受け、手を挙げたり暴言を吐いてしまいそうになったりした時に、座位にて呼吸を整えた後に、タッチングを行うことが、虐待防止としては有効であると考えられる。

当研究の意味

- 1)日本の認知症の人を在宅で介護する男性の、虐待の実態とその関連要因を調べ、のアンガーマネジメントに着眼した介入効果を明らかにした。
- 2) ストレス反応において効果を実証的に明らかにした点において独創的である。
- 3) 今後は、作成したプログラム効果を、広く家族介護者に実施し比較検討できる。最終的なプログラムは広く社会に普及できるようになる点など意義深い。
- 5)介護のストレッサーが原因と考えられ、健康に寄与できる可能性をもつ。
- 6)アンガーマネジメントは、介護負担感や怒りの保護要因(緩衝)であり、虐待を制御できる可能性がある。
- 7) アンガーマネジメントを中心とし、対象者の介護負担感や怒りを軽減でき、虐待は改善される。また、それらの変数間にも関連がある。

謝辞

当研究は、科学研究費の助成がなければ成立しなかった。国民の皆様にお礼をもうしあげます。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 西尾美登里、木村裕美、古賀佳代子、小林光恵、田村馨	4. 巻 4
2. 論文標題 自立神経測による妻へのフェイシャルケア効果の基礎的研究	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 FREGRANCE JOURNAL	6. 最初と最後の頁 1,7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 西尾美登里	4. 巻 22(3)
2. 論文標題 認知症者を介護する男性のストレス反応と支援	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 地域ケアリング	6. 最初と最後の頁 46,50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 西尾美登里
2. 発表標題 ケアメンの未病について考える
3. 学会等名 第17回未病臨床検査セミナー（招待講演）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	木村 裕美 (Kimura Hiromi) (00301359)	福岡大学・医学部・教授 (37111)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	緒方 久美子 (Ogata Kumiko) (00309981)	福岡大学・医学部・教授 (37111)	
研究分担者	坂梨 左織 (Sakanshi Sayori) (20569644)	福岡大学・医学部・講師 (37111)	
研究分担者	尾籠 晃司 (Ogomori Koji) (40211817)	福岡大学・医学部・准教授 (37111)	
研究分担者	久木原 博子 (Kukihara Hiroko) (50268950)	福岡大学・医学部・教授 (37111)	
研究分担者	大上 渉 (Oue Wataru) (50551339)	福岡大学・人文学部・教授 (37111)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	内田 直樹 (Uchida Naoki)		重症認知症デイケアと認知症者の訪問診療を行うクリニックの院長である。

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------